
See you again

戦人はヒロイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

See you again

【Nコード】

N2333W

【作者名】

戦人はヒロイン

【あらすじ】

ひよんなことから神秘というものいたってしまった俺、しかも死んでしまったらしい。よく分からんガイアっていう存在に神秘という魔法か、科学という名の魔法かをたずねられた俺。神秘を選んだがは良いが何が起こったのか訳がわからねえ。そんなこんなで始まるぜ。

Nice to meet you (前書き)

作者はうみねこの詳しいストーリーをよく知りませんので作中に出てくるうみねこキャラはまったく違うようなものになるかもしれません。そのことをご理解いただけますよう
よろしくお願いします。

Nice to meet you

俺は何でこんなところにいるんだ？

確か自分の部屋で魔術という名の実験をやっていたはずなのに。

「その疑問には私が答えてやろう」

そう声が聞こえた瞬間、そこに存在するだけで吐き気を催し立って
いられ無くなる

ほど圧倒的な存在が目の前に現れた。

「どうした、這いつくばってないでしっかり立たないか。

違うな立て無かったのか」

なんてことをいけしゃあしゃあと言いやがる圧倒的存在。

「ふむ、仕方ないから存在の大きさを少し下げることになろう。

これで立てるし喋れるようになるだろう。

さて、お前は何だ？

おっとこれは失礼人に名前をたずねるときは自分から名乗るのが
礼儀だったな。

私は世界中今もなお増え続けている生命の塊といえる存在だ、名
前は無いが

まあガイアとでも読んでくれたまえ。

さてもう一度、お前は何だ？」

ガイアは薄く笑いながら言った

「名乗られて名乗り返さないのは礼儀に反するな。

俺は鐘鳴かななり 戦人はしじんだ。

で、どうして俺はここにいる？」

待つてましたといわんばかりの顔でガイアは嬉々として語る

「最後に魔術という名の実験やっていたでしょう

本当に魔術になってしまったんですよ。

現代においてそんなことが出来る人は本当に稀でしてね、望むの
ならさらなる深みへと

誘いましょう。望んだ場合、元のところにはいられません。」
元のところにいらなくなるっていうのはどおゆうことだと訊ねると、

世界間の移動だというプラス俺の存在の抹消つまり最初からいなかったことになるらしい。

どれくらい悩んだか分からないが俺は口を開いた。
魔法のさらなる深みへ、と。

ガイアは次に笑いながら

「では神秘と科学どちらが良いですか？

ちなみにどちらも魔法ですが方向性はかなり違います」

俺は神秘と答えた

Nice to meet you (後書き)

お楽しみいただけましたでしょうか？

次から本編に入りますがその前に一つこの話ではうみねこ本編のよ
うな論争は出てきませんのでよろしく願います

Good-bye (前書き)

ここから先は作者の趣味全快の自粛小説となります。
そつゆうのが嫌いなことは今すぐここから離れてください

Good - bye

「さてどちらの魔法にするかも決まったことですし次はあなたの才能を決めましょう。

なに心配することはないですよ、私は生命の塊、たいがいことは簡単に出来ます。

さあ何が良いですか。」

俺が答えるの待ち望んでいるガイア。

そんな相手におれはこうこ答えた。

「うみねこに出てくる煉獄の七杭人格はルシファーだけでいい、あとロノウエが召喚したい、実際にそこに存在するように一般人にも見えるように。」

それと黄金夢想曲に出てきた戦人の全ての技とつかえるようにと、エンドレスナインを切り替え可能にしてくれ。

これで最後、今まで上げたものを本来の二百倍くらいの強さにしていくれ。」

最後まで言い終わるとガイアは不満そうにこう言った。

「そんなものでいいのですか」と卑怯くさい無限の剣製とか直死の魔眼とかあまり知られてないあたりだと

文殊とかは欲しくはないのですか？」

本当に不思議そうにガイアは訊ねてきた。

別にこれで十分言うと、また不満そうな顔をして何か後一つ増やせ、言った。

「しかし、これ以上増やせと言われても」と困った顔をするとなら自分が決めるとか言い出した。

まあ俺が決められないから決めてもらうのはおおいに結構なんだけど変なことはしないだろ。

「よし決めたぞ。」

眷属を呼ぶときは魔力をいらなくしましょう、

プラス他の魔法を使うときも魔力の減る率を少なくしよう。

だけどそれだけだと体が耐えられませんか

ついでに体のほうもゴジラとタイマンはれるようしときましょう。

┐

さっき思ったことを訂正する。

ナンだよ、まあ最初の二つはいい、まだいいけどなゴジラとタイマンはれるってモはや人間じゃないだろ。俺がそんなことを言おうとしたとき、ガイアは両手を

上げではさらばだ

神秘の世界に行つてらっしゃいとか言つて俺を落としかつた

ここで俺の意識は途絶えた。

次に意識が浮上したのは三歳の頃だった。

親は普通だった俺の名前は普通じゃなかった。

このたび「海鳴 戦人」となりました。ってかここどこだよ。

地名を調べたら麻帆良だったorz 確かに神秘と言う名の魔法が出てくるけど裏どろどろじゃん

もし科学を選らんでたらりりのなの可能性もあったわけだからあんまり変わらん。

次に西暦を調べたら1983年だったどうやら大戦は終わっていいようだ。

少し安心した。今は特にすることがないな、と思い俺は眠りについた。

それから三年ようやくルシファーとロノウエを召喚する機会が来た。

このときをどれほど待ち望んだことか、親が過保護だから一人になんかしてくれなかったからなかなか出来なかったのだ。

その代わりにこの身体はすごい性能だということが分かった。

軽く走ったのに自動車と同じスピードが出るし、蜂の羽ばたきが肉眼ではつきり見える。

ゴジラとタイマンはれるというのは嘘じゃなさそうだ。

そんなこんなでついに俺は悪魔を召喚した。

Good-bye (後書き)

すいません本編に入れませんでした。

正直に申しあげるとまだまだ原作には入りませんのでご了承ください
い

主人公紹介

鐘鳴 戦人 二十歳

から

海鳴 戦人^{はいつ} 六歳↓二十歳

男性

容姿 まんまうみねこのなく頃にの右代宮 戦人

性格 基本お人よし、困っている人がいるとほおって置けない。

頭はきれ。本を読むのが好き。

嫌いなことは無視、人を傷つけること

能力 とくに何かあるわけではないがゴジラとタイマンはれるなみに強い（魔法及び氣による強化無し）

黄金夢想曲に出てくる戦人の技は全て使える（応用可）

魔力を身体に纏わせて体の硬度を上げることが出来る。

しなくても岩を思い切り殴った程度では傷一つつかない。

エンドレスナイン いかなる異能の力でも戦人に傷をつけることが出来ない。

普通は自分のみだが相手を中に入れることにより相手の異能の力を使えなくさせることも出来る。

技 青き真実

青い鳥形の飛び道具を放つ

青き一撃

斜め上へアップーの青い衝撃波を放つ

ソムリエフィンガー

片腕を突き出し突撃する紳士の技だが、この話では握った所

をそのまま握り潰す技になっている

青き急襲

やや上に跳ねてからの飛び蹴り

青き鋭き真実

一瞬タメてから、青いレーザーを放つ

青き絶対の一撃

格好いいポーズからの超アップー

青き優雅なる急襲

かなり高く上に跳ねてから飛び蹴り

全てを穿つ青き真実

有能なポーズからの、ごくぶとレーザー

海鳴 縁寿^{えんじえ} 十三歳

女性

容姿 うみねこの右代宮 縁寿そのまま

性格 お兄ちゃん大好きの変態。最近兄の写真を撮ることが趣味なようだ。

基本めんどくさがりだが兄が絡むと別。勉強は出来るようだ。
得意科目は国語。

技 串刺しの刑

相手の足元から槍が数十本出てきて串刺しにする。

ロングヌス

バカみたいに威力の高い槍を相手に向かって投げつける。
ネギ君の巨神殺しの槍とは比べてはいけなくらい強い。

ブリューナク

投げた直後に五つに分かれて相手を追いかける。

串刺しの刑 終幕

相手の周りを槍が囲い一斉に発射される。

イメージがづらい人は千本桜の最後から二番目の技を想像してください。

橋本 エリカ 十三歳

女性

容姿 まんまうみねこの古戸 エリカそのまま。

性格 変態の一言に尽きる。夢は戦人を裸にして鎖をつけること。

勉強はまあそれなりだが国語だけは学年で一位、二位を争うレベル。

技 魔女狩り

鎌が大きくなって切れ味が上がる。

ソールイーターの魔女狩りと一緒。

魔人狩り

鎌の切れ味がさらにあがる。

ソールイーターの魔人狩りと一緒。

魔王狩り

鎌がバカみたいに大きくなって半径十キロ圏内なら切り裂けないものはない

とまで豪語する必殺技。

口ノウエ ???歳

男性

容姿 まんまうみねこの口ノウエ

性格 愉快犯、主人を主人と思ってない発言をたまにする

現在、喫茶店ノックスを営んでいる

技 何をされたのか分からないため不明

ルシファー ???歳

女性

容姿 まんまうみねこのルシファー

性格 傲慢のはずなのだがこの作品ではかけらも出てこない。

気配りが出来るやさしいお姉ちゃん。ツンデレだと思う。

技 燃える天空

ネギまの上位魔法

千の雷

ネギまの上位魔法

凍る世界

ネギまの上位魔法

裂ける大地

ネギまの上位魔法

七つ鍵の守護者

ルシファーを中心に六つの杭が魔力をためて放つ必殺技。
当たらなくても熱量だけで身が熔ける。

まずほとんど使うことはない

M y n a m e (前書き)

やっと悪魔に会えました。

ここからは少し急ぎ足で進めていききたいと思います

My name

召喚陣が光り輝くとそこに二人の男女がいた。

男のほうは執事のような三十代で

女のほうは少し失礼だが簡単に言うて見ていて恥ずかしなる格好だ。
言葉では言い表せないのぜ気になる

ひとは各自調べてみてくれ。

「召喚されました七つの大罪、傲慢のルシファーとその他の大罪を
あらわした杭でございます」

「召喚に応じましたソロモン72柱が一人ロノウエでございます。
まさかわたくし度どもを召喚できるからにはもつと年老いた人物
かと思いましたか」

またこれは可愛らしいお子さんで。ぷつくつく」

ルシファーはちゃんと礼儀をわきまえているがロノウエは初対面な
のに少し失礼だ。

そのことが顔に出ていたのだろうロノウエがおきに召しませんでし
たかと訊ねる。

しかしそののののことを言わないロノウエはロノウエではないので別
にかまわない、と告げる。

ルシファーはまだ緊張しているようで声をかけると変な声を出した。
「はいいいーな、なんでしょうか？」

緊張している姿が可愛くて思わず笑みがもれる。

「ルシファーお前は自分の立場をどう思っている？」

家具だとか思っているのならその考えを改めて欲しい。

俺は使用人ではなく朋が欲しかったんだ。

ロノウエお前はそのままでもいい黙ってる」

ロノウエが口を開く前に釘をさす。

ルシファーが困惑した顔で、本当によろしいのですか、と訊ねてく
る。

それにおれはもちろんと言って返す。

その後はとくにやる事がなかったので特技や趣味について話した。ロノウエとルシファーに修行をつけてもらうことになった。いつの間に関に？

ルシファーとロノウエには他人には見えないようにしてもらった

次の日学校に行った後修行開始

「坊ちゃまは力がありますが無いです技能がありませんな。まあそれは修行していくうちについていくでしょう。」

ですから今日はわたくしとルシファーとで一緒になって殺しにかかりますから必死に逃げてください

ただしあまり人目にふれてはいけませんよ。ぶつくつく」

ロノウエは心底楽しそうに、ルシファーは申し訳なさそうに。

ごめんなさいと言った後に襲いかかってきた。手に魔力で出来た赤色の刃を光らせて。

「マジで死、死ぬかと思った。」

と俺が大の字になって転がっていると二人がちかちかしてきた。

「ふむ大体分かりましたかな殺されそうになる感覚は？」

今日はこれで終わりですが明日からは基本からたたきこみますよ

わたくしに言われたこと意外はやらないように、身体を壊してしましますから」

ロノウエがそお言い終わったあとルシファーが駆け寄ってきて

「大丈夫、戦人。大きい怪我とかない？」

と言つてタオルとお茶を持ってきてくれた。

「ありがとう」というと

「と、当然よなんせ友人なんだから」と、頬を赤らめながら返してくれた。

その後は風呂に入って飯食って歯を磨いて寝た。

次の日、学校がおわってからまた修行開始。

ほんとに基本から叩き込まれた。

次の日も次の日も。

そんなことを続けて一年たったある日、両親から大事な話がある、と言われて呼び出された。

呼び出した両親の母の腕の中に赤ん坊がいた、それで思わず

「親父の隠し子？」と、半ば本気で訊いてしまった。

父はそんなことあるかと言つてどうしたのかを説明した。

単純明快に言つて公園で母が拾つたらしい、そんな犬や猫じゃあるまいし。

しかも名前ももう決めてあるらしい、役所や警察に言わなくても良いのかと訊くと、

捨てた親を探しても仕方がないわ、と言つて一蹴された。

父は一応探してはくれるらしい。
新しく縁寿えんじゅという妹が出来ました。

My name (後書き)

次から年数がかなり飛びます。

縁寿が出てきたのは好きなキャラだからです。

うみねこキャラはもう一人出ます。次かその次くらいに。

ここまで読んでいただいてありがとうございます。

でわまた次回。

What do you want to do? (前書き)

いきなり年数がいつきに飛びます。
修行をぐだぐだしていてもアレなんで
では、始まります。

What do you want to do?

妹が出来てから三年がたちました。

ロノウエとルシファーから基礎はもうほとんど完璧だ、及第点をもらったがそんなことはどうでもいい。

もっと大きな事件があつたんだ、なんだと思う？

縁寿が喋った、しかもお父さんとか、お母さん、とかじゃなくて、「おにいちゃん」って。

少し舌足らずなところが可愛さを上げている。

赤で言えない（書けない）のが悔やまれるが、これだけは言わせて欲しい。

海鳴縁寿は海鳴戦人の天使である。

考えても見てくれ、自分が大切にしている妹、弟、年の離れた従兄弟が母でもなく父でもなく

自分の名前を一番最初に呼んでくれることを。

うれしい、なんてものじゃねえ言葉でいいあらわせねえ最高の気持ちになれるぜ。

後他にも縁寿がくだとか、アレをしただとか

以下延々と妹のべたほめが続く。

修行もやっとなつてきたんでロノウエがそろそろ実践形式にしましょうかとか言い出した。

「え、やっとな基礎が終わったところじゃなかったのか？」

「ええそうです。基礎は終わりました。基礎が出来ているのなら、戦えます。」

死なないように頑張ってくださいね。ぷくく。

相手はわたくしが召喚する悪魔です。」

いつもどおりムカつく笑い方をしながら告げる、ほんとにこいつは悪魔だ。

「頑張つてね、戦人」とルシファーが笑顔で応援してくれる。

その笑顔に思わず「俺、頑張る」と告げる俺、だって美少女からの応援なんだもん。

「明日からも頑張つていきましょうね」とロノウエが告げて今日は終了。

次の日、縁寿とおままごとをした。

そのまま会話を抜き出したから、疑問に思った人はきつと正しい。

縁寿「おにいちゃん、おままごとしよう。」

戦人「おう、いいぜ。どんな風にする。」

縁寿「えんじえがおとうさんでおにいちゃんがおかあさんね。」

戦人「よし、それじゃあやるか。」

縁寿「おしごとからかえつてくるところからね。」

ただいま〜いまかえったぞ〜。」

戦人「お帰りあなたお疲れ様、お風呂入っ「ぜんぜん駄目だよおにいちゃん。」

え、じゃあどうすればよかったんだ？分からないから教えてくれ。」

縁寿「おふろにする？ごはんにする？それともわ・た・し？vって言えばよかったんだよ。」

分かったおにいちゃんやりなおしね。

ただいま〜いまかえったぞ〜。」

戦人「おふろにする？ごはんにする？それともわ・た・し？」

縁寿「だめ、ぜんぜんだめ。」

愛が足りてないよおにいちゃん。

おままごとはやめて、今日はそのセリフの練習だね」

笑いながら決定する妹、結局その日は合格をもらえなかった。修行にもすっかりと身が入らず二人に心配されてしまった。

寝る前に縁寿にこういわれた

「おにいちゃんが結婚できなかったら縁寿がもらってあげるね（誰にも渡すつもりなんてないけど）」

おう、よろしくな、って返したのだが実は本気だったことを後から知ることになる。

縁寿の誕生日に買ってやった髪飾りは非常に気に入ってくれたようだ。

ルシファーとロノウエと一時間かけて選んだかいはあったな。

その日もままごとをしたんだがやっと前のセリフ、合格点をもらったぜ修行より厳しかった。

これでもう大丈夫かと思ったがその日のままごとで下記のセリフを頂きました。

「私と仕事、どっちが大切なのよ」

俺頑張れ。

それから数日後、俺は縁寿をつれて公園に行つてある少女とであった

What do you want to do? (後書き)

今回は縁寿の話でした。

ロノウエとルシファーが空気過ぎる。

まあ、頑張ります

How did you do? (前書き)

昨日は更新できなくてすいませんでした。

今日はうみねこキャラ、たぶん最後の一人が登場します。

若干おかしくなっておりますがご了承ください。

それでは始めます。

How did you do?

縁寿と同じ年くらいの女の子が一人公園のベンチに座っていた。座っているだけなら問題無いんだけど、泣いているとなると少し問題だ。

可愛い女の子が涙を流すことはいかなることをしてでも止めねばならない。

なんてアホなことを考えていると横の縁寿が「行ってきたいいよ、おにいちゃん」と言ってくれた。

俺はなんて出来のいい妹を持ったんだ。

「じゃあ、一緒に行ってくれる？」と訊くと
「うん、いいよ」と返してくれた。

少女に近づく俺たち、これがもし三十路のおっさんとかだったら、一発で通報ものだ。

そして女のこに声をかける。

「どうして泣いているの、何が悲しかったの？」と訊ねる俺。返してくれるか？

少し間をおいて少女は口を開いた。

「ヒック、振られたの。ヒック、好きだった男の子に振られたの。大好きだったのに。」

「うえーん」

また泣きだしてしまった。

俺は女の子の頭を撫でながら

「好きなら振り向いてもらえるようにアタックし続ければいい。大好きなんだろ」

女の子は泣きながら「でも他に好きな子がいるってえー」

俺が少し困っていると縁寿が

「だったら新しい恋を見つければいいのよ」

なんてことを言い出した。

そんな簡単にいくものか、と思っていると女の子は泣き止んで

「そうねそのとうりね」なんて言い出した。

それからやっと女の子の名前を聞いた。

「そっいえば名前はなんていうんだ。

俺は海鳴 戦人。七歳だ」

「縁寿は海鳴 縁寿だよ。四歳です」

「私は橋本 エリカといいます。四歳です」

お互いの自己紹介が終わった後俺は言葉をつむいだ。

「これからよろしくなエリカ。俺と縁寿はこの時間帯はたいがいここにいるようにするから」

なにを言いたいのかよく分からない顔をしているので説明してやった。

「失恋の話を聞いて、お互いに自己紹介をして友達になったと思っただけが違ったか？」

と訊くと「うん」それだけを返してくれた。

言葉は単語のみだったが思いはたくさん詰まっているような気がした。

それから俺たちは日が暮れるまで一緒に遊んだ。

「明日もまた会える？」と上目使いにエリカが訊ねてくる。

「もちろん、また明日」と俺と縁寿が返す。

「また明日」とエリカも返して俺たちは別れた。

今日の修行はなんかものすごくうまくいきました。

How did you do? (後書き)

後一話書いたら縁寿、エリカが中一になります。
そこからどうやって主人公が関わっていくかを見ていてください。
これにて終わります

E x i s t e n c e o f m a g i c (前書き)

この話で幼初期は最後になります。

季節ごとのイベントは番外編として主人公以外に語ってもらうことにします。少し強引ですが目を瞑ってください。
それではハジマります。

Existence of magic

何でも無い平日の午後、いつもと同じように三人で集まっていたときのことだった。

「じつは二人に秘密にしていたことがあるんだ。」

俺はそう言葉は切り出した。

二人は目を輝かせて訊ねてくる。

「それってなあに？おにいちゃん（ばとら）。」

「じつはな、俺は魔法が使える。」

そう、なぜか俺は口にしていた。今、ここで伝えとかないともう伝える機会が無い、

取り返しのつかなくなることになるんじゃないかそんな不安が頭をよぎった。

だから俺は口にした。魔法は秘匿するものなのに。

「そうだったのおにいちゃん。たまにおにいちゃんの後ろにいた女の人と、

男の人も使えるの？」

「あの二人もきつと使えますよ、そんな格好してましたし。ねえばとら。」

俺は開いた口がふさがらなかった。

「見えてたのか？」

「うん、結構前から、お話も少ししたよ。」

「クッキーももらいました。」

それを聞いた瞬間、俺は叫んでいた。

「ロノウエー、ルシファーちょっと来い。」

そう叫んだ後二人はすぐに現れた。

「呼んだ、戦人？」

「どうなさいましたか戦人様。」（余談だが坊ちゃまは恥ずかしかったので変えさせた。）

「お前ら二人に聞きたいことがある。何で縁寿とエリカに知られているのを俺に伝えなかった。(怒)」

「え、知らなかったの？ごめんなさい。そうとは知らずに普通におしゃべりしてました。」

「ご存知無かったのですか？とづくに知ってらっしゃるかと思っていました。」

しれっと答えるロノウエ。

ルシファ―は本当に知っていると買ったんだろう。

だがロノウエは別だ、絶対確信犯だこいつ。おおかた俺が知ったときにあたふたするのが見たかったに違いない。

そんな会話をしていると二人に魔法を見せてとせがまれた。

俺としてはロノウエにもっとビシツと言いたいのだがまあ後にしよう。

「おし、魔法を見せてやろう。隙間が出来るように両手を合わせて目を閉じてごらん。」

ポイント魔法はある、と強く信じることに。いち、にの、さんで目を開けてくれ」

素直に従う二人。主を敬わないどこかの執事とは大違いだ。

「いち、にの、さん。」

目を開ける二人。すると二人の両手の隙間から黄金の蝶が数匹飛んでいった。

あまりのことに言葉が出ない二人だったが、すぐに我を取り戻してこういった

「おにいちゃんすごい。もう一回やって。」

「もう一度みたい、ばとらお願い」

それから何度か趣向を変えてやっていったが自分でもやりたいと言いつ出した。

「よし、やり方を教えてやろう。なあに難しいことはない、ただ魔法を信じればいい。」

信じる事が魔法を使う上で一番の力になる」

そついうと二人は自分に暗示をかけるかのように目を瞑った。

偶然だったのか必然だったのか風が吹くと同時に二人は目を開けた。その瞬間黄金の花びらが舞った。

今度は俺の開いた口がふさがらなかった。一発で出来るってどんな才能の塊だよ、と。

「できた、できた」

「本当に出来た。」

縁寿は心底うれしそうに、エリカは出来たことに驚いてほおけている。

後ろから拍手がなった。ロノウエとルシファーだ。

「素晴らしいですよ、お二人とも。とても綺麗でした」

「すごい綺麗だったよ、縁寿ちゃん、エリカちゃん」

とほめるロノウエとルシファー。

二人はほめられたことが嬉しかったのか顔を少し赤くしている。

「他にどんな魔法があるのにおにちゃん」

「他にもやってみたいです」と訊ねてくる二人。

困ったことに俺は魔法が使えるといってもほとんど知らない。

助けを求めてロノウエとルシファーを見ても二人は笑っているだけ。

「ええと、その、」

俺が口ごもっていると明日から魔法も練習だね、とルシファーが告げる。

すると縁寿とエリカが私たちも一緒にする、と言い出した。

うんいいよ。皆で頑張ろうと言うルシファー、それにつられて二人もおおーと声を上げる。

そしてなぜかまた不思議なことに格闘のほうの修行にも参加するようになった二人。

参加が決定したときにこう言われた。

「早くおにいちちゃんよりも強くなって守ってあげるね」

「ばとらは私が守ります」年下の女の子にそう告げられる俺、どれだけ信用無いんだ。

なんかしまらずに今日という日は過ぎていった。

次から年数が一気に飛ぶぜ、たるい修行風景はなしだ。

E x i s t e n c e o f m a g i c (後書き)

これにて幼初期は終了となります。

強引でごめんなさい。

次からは中学校となります縁寿とエリカが。
それでは皆さんさようなら

S t a r t o f j u n i o r h i g h s c h o o l (前書き)

このはなしから中学校になります。

作者が一番書きたかったことがかけます。

ヒロイン二人はどんどん変態かしていきますのでご了承ください。

Start of junior high school

唐突だが俺は今麻帆良学園女子中等部の職員室にいる。

別に忍び込んで見つかったのがばれてここにいるんじゃない。
ちゃんとした職業としてここにいる。

ここまで言えばもうお分かりだろ、俺の職業は国語の教師だ。

新任してきたばかりなのに副担任を任された。担任は高畑・T・タカミチ先生だ。

クラスは1A。余談になるが学園長を含め魔法先生は俺と縁寿とエリカが魔法使えることを知っている。

何でばれたかという俺がへまをやらかした。

ロノウエとルシファアの存在も俺の使い魔として認めてくれている。

二人は表の職業として喫茶店を営んでいる。戸籍ともども学園長にお願いした結果だ。

なかなか繁盛しているらしい。

さてここまで言えば縁寿とエリカのクラスも分かるだろう、もちろん1Aだ。

そんなことを考えているうちに職員室から出て1Aの教室に着いた。

高畑先生が落ちてくる黒板消しを受け止める、足元のロープを踏み越える、水の入ったバケツの水を

こぼさないように床に置く、飛んでくる矢をはたき落としたところでトラップは終了。

高畑先生に関心の声を上げているうちに俺も教室に入る。

縁寿とエリカには教師になることは伝えたが、クラスを受け持つことは伝えていなかったの

驚いている。

「初めまして。今日から君たちの担任になる高畑・Ｔ・タカミチだ
よろしく」

と手短に挨拶する高畑先生。

「このクラスには副担任の先生もつくから挨拶してもらおう。お願い
します海鳴先生」

俺も挨拶するために前に出る。

「初めまして、このクラスの副担任になりました海鳴 戦人です。
担当教科は国語、趣味は料理です（この数年で出来るようになった）
よろしくお願いします」と挨拶を終える俺。

「よし、一番最初は自己紹介からにしようか明石君から出席番号順
にお願いするよ。」

一人につき質問は三人までいいことにしよう。それでは初めてく
れ。」

一人、一人、自己紹介を終えていく俺も生徒の顔と名前を一致させる
ためにしつかりと聞いていた
ところで爆弾が落とされた。

「海鳴 縁寿といいます。趣味は（兄の）写真を撮ることです」
縁寿の趣味が写真だとは知らなかったな。

「はいはい質問です。何で海鳴先生と名前が一緒なんですか？」
俺はこの質問はくると思っていたし普通に答えると思っていた。

「それは戦人先生が私の 嫁 だからです。」

瞬間空気が凍った。一番最初に我を取り戻したのは俺だった。

「何を言っているんだ縁寿、兄妹だろうに。てか、嫁てなんだよ嫁
って」

次にエリカがとんでもない発言をしてくれた。

「そうですよ、お二人は兄妹じゃないですか。それに戦人先生は私
に永久就職するんですから

かってなこと言わないでください」火に油を注ぎやがったこいつ。
「兄妹であることは問題ないわ、だって血はつながってないもの。
昨日両親から聞いたわ。」

問題ないわね。そっちこそ勝手なこと言わないで、お兄ちゃんは私の嫁にするの」

血のつながりという結構ディープな問題を軽くむしろそうであってよかった、といった風に話す縁寿。

話の収集がつかなくなってきたところで高畑先生が口を開いた。

「そろそろ話を進めていいかな？その話は後で当人たちで話し合ってくれるかい。」

じゃあ次の人お願いするよ」高畑先生がそう告げると教室はほんの少しだけ落ち着きを取り戻した。

でもきつと俺はあの二人からは逃げられないんだろなと思いながら時間は過ぎていった。

空は青く澄み渡っていた。

S t a r t o f j u n i o r h i g h s c h o o l (後書き)

やっと中学校生活が始まりました。

ヒロイン二人の変態具合もだんだんエスカレートしていきます。

頑張れ戦人、負けるな戦人と思いながら話を進めていきます。

原作までは駆け足でいきます。

それではさようなら。

Combat beginning(前書き)

日常生活裏つまり学園防衛の話となります。
それでは始めます。

Combat beginning

前回学園長に魔法が使えることがばれている、ということと言ったのは覚えてるだろうか？

当然のことながら俺、縁寿、エリカは防衛のシフトが組まれている。そして今は夜、俺は森の中に一人ただずんでいた。

もう夜も遅いし今日は来ないかと思ったが空気を読まずにそいつらは現れた。

「夜分遅くに人の家を訪問してはいけません、するなら連絡を入れましょうって先生から教わらなかった

のお前ら。教わらなかったのなら後日教えてあげるから今日はおもう帰りなさい。」

とめんどくさそうに言う俺。

「ハ―イ、今日はもう帰りますとちゃうはボケ」

のりつつこみで返してくれる鬼。ぶっちゃけこいつとは顔見知りだ。

「だってさあ、たるいんだよホンと。こんな夜遅くにくるとかマジで空気読めよ。」

「それはすまんかったな、けどなこっちも仕事やし負けっぱなしはしようにあわんから付き合って

もらうで。」そお、この鬼とは通算256勝0敗だ。

「いい加減あきらめろよ、奥さんも心配してるぞきつと。まあしやあないはじめるか。」

言い終わった直後俺に向かって太さが一般人の胴回りくらいある金棒が振るわれる。

こんなでかい得物を扱えるのだから鬼も相当デカイ。大体3メートルくらいは確実にある。

俺はそれを体を少しそらして避け鬼に拳をくれてやる。

それだけで鬼は吹っ飛んだ。

「これで通算257勝0敗だな、さて他のやつらもかかって来い。」
なぜかいつもこの鬼以外と一緒に召喚されていてもこいつとの決着
がつくまでかかってこない。
そついう美意識でもあるんだろうか？

人海戦術というのは戦う上で有効な手段だが相手が圧倒的に強いと
あまり意味を成さない。

俺が腕を振るうと数体が還ってしまう。技を使うまでもない。
十分ほどで終わってそこには木以外に何もいなかった。

ついでだから俺や縁寿、エリカ、ロノウエ、ルシファアの戦い方を
説明しておこう。

縁寿は主に槍を使う原作でワルギリアが使っていたようなデカイ槍
を魔力で作ってた。

それも一本や二本じゃない、数十本単位でだ。その気になれば億単
位でも放てるらしい。

しかも相手を囲うようにも放てるらしい。一度千本ほどやって見
せてもらったがアレはひどい。

決して個人に向かって打つ技じゃない。

エリカは同じく魔力で出来た鎌を使う。それを使って相手の首を刎
ねるのだ。

なんか最近ソルイターの魔女狩り、魔人狩り、オリジナルで魔
王狩りというのが出来るように

なったらしい。最初二つは原作とあまり変わらないが最後はやばい。
その気になれば半径十キロ圏内は切り裂けるらしい。上と同じく個
人に対する技ではない。

ロノウエは上二つに比べるとおとなしいだろうが、戦いずらさで言うならロノウエが上だ。

完璧にカウンター型で攻撃してもなぜかこちらがダメージを受けている。

さらに厄介なのが何故こちらがダメージを受けたのかが分からない、という点だ。

ロノウエが何かしたというのは分かるのだが逆にそれしか分からない。

正直自分も相当強くなったと思うが経験の差が大きすぎて勝てる気がしない。

ルシファーは自分の周りに自分を除いた煉獄の七杭を浮かべて戦う。これが相当厄介でルシファーの攻撃を防いでも、他の杭から攻撃がくる。逆もまた然り。

単純な計算でいくとルシファーは攻撃に使えるが両手足含め十本もあるのだ。

それだけならまだ良かったのだが杭は一つ、一つ独立してネギまの魔法も含め魔法を使ってくるもん

だから手に負えない。やっぱりルシファーにも勝てる気がしない。

最後に俺だが近づいて殴る、蹴るぐらいしか戦う方法がない。

一応中距離の技はあるのだがあまり使わない、何故使わないのかといえは手加減がしづらいのだ。

だから近づいて殴る、蹴るしか方法がない。

この話をする仲間内であきれられるのわ何故だ？

忘れていたのがエンドレスサイン、これがあれば異能の力は怖くないな。

まあこんなもんだらう。

空には星が輝いていた。

Combat beginning(後書き)

作者すっかりエンドレスサインの存在を忘れていましたので後で主人公紹介に載せておきます。
それでは皆さんさようなら。

S t u d y i n g f o r e x a m s (前書き)

今回はギャグパートです。

Studying for exams

「そろそろ実力も近いことからテスト対策のプリントを配る。解らなかつたら、

手を上げて質問してもいいぞ。残ったら宿題だ。」

俺がそう生徒たちに告げると教室から不満の声がでる。

「ぐだぐだ言つてないではじめる」

そう言うのと教室からシャーペンを走らせる音が聞こえてくる。

「はい、先生この問題が分かりません」

そう言つて手を上げたのは神楽坂明日菜だ。

俺は神楽坂に近づきどこが分からないんだ、と質問する。

神楽坂が解らなかつたの難しい問題で他の生徒に同じ問題が解らないのは何人いるかを確認する。

それなりに解らない、というものがいたので後で解説すると告げる。次に手を上げたのは縁寿だ。

「戦人先生、好きな人を監禁したくて仕方ありません。むしろしていいですか」

「監禁は日本の法律に触れるのでしてはいけません。もう少しノーマルな思考を持ってください」

内心はムチャムチャ動揺しながらも顔には出さないようにする俺。

この会話で静かだった教室に喧騒が生まれた。パンパンと手をたたいて静かにさせる俺。

こいつらが聞き分けが良くて助かった。

次に手を上げたのはアリカだ、絶対に変な発言をかますだろうが他に手を上げている

生徒がいらない以上無視するわけにはいかない。

「先生、先生に裸マントで鎖をつけて散歩させて欲しいです。」

「お断りします、そしてそれは質問ではなく要望ですから間違えな

いように」

「なんでなんですか！ばとらはドMだから絶対にさせてくれると思ったのに」

本気でさせてくれると思っていたらしく呼び方がいつものに戻っているエリカ。

「お兄ちゃんがドMなことは賛同するわ。きつと無理やりのほうがすきなよ」

「そうだったんですか、ごめんなさいばとらん。次からそうしますね。」

あまりのことに口が開かない俺。

そんなことをしているうちに二人だけでなく、クラスの半数がそうだったのか、とうなずいている。

慌てて否定をするがもう遅い。1Aの中で俺はドMということにされてしまった。

どれだけ本人が否定しても大多数が信じているほうが真実とされる悲しきこの世の真理。

これをひっくり返すのは不可能に近いといっていいだろう。

その日から海鳴 戦人ドMという位置づけにされてしまいました。

授業が終わった後ザジが慰めてくれたのが心に沁みた。

太陽はうっとおしいほど輝いていました。

Studying for exams (後書き)

今回は短めの日常ギャグパートです。

何話かに一度こういった話を挟んでいきたいと思います。
それでは皆さんさようなら。

C o n v e r s a t i o n w i t h v a m p i r e (前書き)

今回は皆大好きエヴァンジェリンの話です。

教師と授業に出席しない生徒、どうなるのでしょうか。

Conversation with vampire

俺は今屋上にいる。

何でそんな所にいるのかと訊かれれば不良生徒に授業に出席するよう促しに来たのだ。

「マクダウエルこんなところじゃないで授業に出席してくれないか？」

頼む俺だがマクダウエルは鼻で笑ってこう言った。

「何故私が授業などに出席せねばなんのだ。」

「いやそれはお前が生徒だからだろ。」

こんな会話を週一回は確実にしている。会話だけでもしてくれるのは嬉しいもので最初は無視された。

「まあいい今日は放課後お前だけ補修な、ノックスにくること。お茶くらいは奢ってやる。」

「まあいいだろう、あそこの紅茶のうまさに見じて行ってやるよ。」
そういつて俺は屋上を後にした。

時間は飛んで放課後、俺とマクダウエルはロノウエが経営する喫茶店ノックスに来ていた。

「いらつしやいませ。珍しいね戦人が他の人と一緒に来るなんて。

何かあったの？」

「いや別に何も無いよルシファー、しいて言うならサボりの生徒に注意するためかな。」

「おい海鳴お前はここの店員（悪魔）と知り合いか？」

「ああ、そっぴや教えてなかったな。お前と夜にシフトかぶることねえし。」

こいつらは俺が召喚したんだよ。」

「なつ、お前がかただの脳筋じゃなかったのか。」

「お前何かにつけ俺に失礼じゃないか？」

席に案内してもらいながら喋る俺たち。

紅茶を頼んで待っているんだが沈黙が痛い。

そうしているうちにマクダウエルが口を開いた。

「お前は吸血鬼と話していて何も思わないのか」

と訊ねてくるマクダウエル。

「なにを言っているんだマクダウエルお前は吸血鬼である前に俺の生徒だ。」

それにロノウエとかルシファーと一緒にすごしていた時間が長かったからな

そついう偏見はあまりねえ。まあ、授業に出席しないのは文句言わせてもらっけどな。」

そんなことを話しているうちに紅茶が来た。

「話の続きだが、お前の意見は聞くつもりはない。俺の考えだからな。」

それからは会話らしい会話はなく明日は授業に出るよ、といってお開きになった。

Conversation with vampire (後書き)

今回はかなり短くなってしまいました。

次回はエヴァンジェリン側の心理描写を書きたいと思っています。

その次か次くらいにやっと原作に入ります。

ところどころ原作とは変わっていきます。

それでは皆さんさようなら。

C o n v e r s a t i o n w i t h v a m p i r e 2 (前書き)

前回からだいぶ時間が空いてしまってますいせん。

今回はエヴァの視点からです。

それでは始めます。

Conversation with vampire 2

私は今屋上にいる。

なんでそんな所にいるのかと訊かれれば面倒な授業をサボるためだ。私の呪いは学校に行きさえすればよいのだから、授業をサボってもなんら問題は無い。

というかすでに何度も中学生を繰り返しているのだいやにもなってくる。

そんなことを考えていると屋上のドアが開いた。

あの赤髪の男が屋上にやってきた。

入ってきた男、海鳴^{うみなり} 戦人^{はとら}は私を見るとこういった。

「マクダウェルこんなところにはいないで授業に出席してくれないか？」

私は思わは鼻で笑ってこう言った。

「何故私が授業などに出席せねばなんのだ。」

「いやそれはお前が生徒だからだろ。」

確かにそのとうりなのだが私には関係ない。

こいつと高道とジジイ以外で私に怯えや嫌悪感を抱かないものはいない。

他の者は大なり小なりそうゆうものをもっているはずなのだが。

高道やジジイはまだ分かるがこいつだけは何故そうなのかが分からん。

最初は会話などしなかったのだがこいつがあまりにもしつこいので会話をしてやったのだ。

ため息をついた後、海鳴はこう切り出した

「まあいい今日は放課後お前だけ補修な、ノックスにくること。お茶くらいは奢ってやる。」

こいつの言う補修なんぞどうでもいいがノックスの紅茶が飲めるのはいい、

あそこの紅茶は美味しいのだ。

「まあいいだろう、あそこの紅茶のうまさに免じて行っってやるよ。」
そうして海鳴は屋上をあとにした。

時間は放課後。

私は右代宮と一緒に喫茶店ノックスに来ていた。

「いらっしやいませ。珍しいね戦人が他の人と一緒に来るなんて。何かあったの？」

店員と親しげに会話する海鳴に私は疑問に思った。

「おい海鳴お前はここの店員（悪魔）と知り合いか？」
訊ねるとこいつはしれっとこいいいはなった。

「ああ、そっぴや教えてなかったな。お前と夜にシフトがぶることねえし。」

こいつらは俺が召喚したんだよ。」

私は思わず

「なっ、お前がかただの脳筋じゃなかったのか。」

なんて言ってしまった。近づいて殴る、蹴るといった攻撃しかしてないと聞くこいつが

召喚しましたなんて聞かされると正直信じられない。

「お前何かにつけ俺に失礼じゃないか？」

そう言ってふてくされる海鳴。

席に案内してもらいながら喋る私たち。

紅茶を頼んで待っているんだが沈黙が痛い。

何故何も喋らんのだ海鳴！こういうものは普通男が話題を提供するものだろう。

仕方なく私が口を開いた、が出てきた言葉は私の意に反するものだった。

「お前は吸血鬼と話していて何も思わないのか。」

何故こんなことを口に出したのかが分からない、何故？という思考のループに陥りそうなところで

海鳴の声が聞こえた。

「なにを言っているんだマクダウェルお前は吸血鬼である前に俺の生徒だ。」

それにロノウエとかルシファーと一緒にすごしていた時間が長かったからな

そういう偏見はあまりねえ。まあ、授業に出席しないのは文句言わせてもらっけどな。」

話をさえぎるかのように紅茶が来た。

海鳴は一口紅茶を飲み話を再開した。

「話の続きだが、お前の意見は聞くつもりはない。俺の考えだからな。」

それからは思考のループに陥りまともに海鳴の声なんか聞いていなかった。

最後に明日は授業に出席しろよ、とだけ言われたのを覚えている。

Conversation with vampire 2 (後書き)

エヴァとの会話は終了。

これ以上の接近はネギ君が来てからです。

ちなみにエヴァはヒロインにはなりません。

ヒロインは縁寿とエリカしかいませんといつかまわせません。

それでは皆さんさようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2333w/>

See you again

2011年10月9日14時57分発行